

[書評]

高崎経済大学地域政策研究センター編  
『群馬の再発見－地域文化とそれを支えた産業・人と思想』上毛新聞社 2012年

駒木 伸比古

Nobuhiko Komaki

本書は、高崎経済大学地域政策研究センターが2009年度から行った「群馬県内の産業遺産や地域文化に関する調査・報告」プロジェクトの成果をとりまとめたものである。「産業遺産」、「産業考古学」、「地域遺産」、「地域文化」といったキーワードから、群馬という地域をとらえる取組と位置づけており、本書は3部構成となっている。以下、それぞれに収録されている章タイトルと内容を紹介し、評者による若干の所見を述べていく。

第1部「“地域文化”の数々」は、群馬県に残る地域の文化を示す遺産・暮らしを扱った4つの章から構成されている。第1章「地域の発展を支えてきた橋梁の歴史から学ぶ文化や産業遺産としての意義」は、群馬県内に架かる橋梁を、産業遺産および近代化遺産という観点から紹介、考察している。橋梁は河川という自然地形によって隔てられた2つの地域を結ぶものである。明治期以降、日本が近代化に向かうなかで社会経済的・文化的両面から地域社会を支えてきた基本的なインフラとして橋梁をみれば、近代化を進めた歴史的な資源として、価値を見出すことができよう。ただし、保存を目的として様々な制度が整備されているものの、その運用に改善点を指摘している点も興味深い。例えば登録有形文化財の場合は所有者または自治体が自主的に申請するものであるため、地域的偏りが発生しがちである。したがって、県内などの一定の地域内で客観的な基準を作成するなどの文化政策・制度の検討が必要であるとも言える。

第2章「群馬県西毛方言における〈すまい〉を表す語彙－高崎市上佐野町、藤岡市中大塚を例に」は、民家（すまい）の構成要素を示す語句について高崎市および藤岡市の2例をとりあげて検討してい

る。お互いに隣接している地域であるが、語彙において共通点とそうでない点があることは、地域または個人の生活様式を反映していることに気づかされる。また、筆者が最後に指摘しているように、生活様式が大きく変わり、かつての暮らしを体験している世代が少なくなっている現在、当時の様子を調査・記録しておくことは、地域のルーツを見直すという意味でも喫緊の課題であるともいえる。

第3章「低湿地帯“水場”をめぐる地域文化－群馬県板倉町の今昔」は、「重要文化的景観」に選定された水場に残る生活を通じて、先人が作り出してきた精神的な価値を説いている。特に、文化財保護政策における「景観」や「モノ」の「保護」への偏重が、伝統と現実の乖離を生じさせていると警鐘を鳴らしている。確かにそうした歴史的価値のある「モノ」を保存していくことも重要であるが、そこに実際に住む人々の暮らしを蔑ろにしては本当の意味で地域文化を考えていくことにはならないであろう。これは後述するが、評者の所属コースの名称である「まちづくり」にも、大いに示唆を与えるものであった。

第4章「伝統文化の地域振興への活用について－川越での事例を基にした甘楽・富岡地区での茶の湯イベント構想」では、地域振興を地域の特徴の共通化の機会ととらえ、伝統文化を活用した地域の特色の演出の実態報告および提案を行っている。筆者の「イベントを契機として地域の特色を外部の人たちに理解してもらう」ことを目的とした活動は、評者が参加している豊橋市中心市街地でのまちづくり活動と重ねて読むことができた。メンバーとの議論のなかでも、筆者の主張と同様の意見が交換されており、イベントの主催者がまずは地域の特色をよく

知っていることこそが重要であることを再確認した。

第Ⅱ部「“産業”に支えられた日々」は、群馬県という地域の特性を反映した産業を扱った4つの章からなる。第5章「戦前の群馬県における電気事業史と現代の電気事業問題に関する一考察」は、群馬県における電気供給をめぐる歴史的な展開を、残された資料をひも解きながら整理している。そして、「群馬県における電気事業史のまとめ」というだけではなく、東日本大震災以降に議論が活発化している今後の日本の電気エネルギー問題への示唆を与えていることにも注目したい。当初は地産地消的であった電気エネルギーの空間構造が、技術の発達や需要の拡大によって統合・整理されてきた。こうして生じた需給の空間ミスマッチが、「他の地域に電力を供給していた施設によって自分の地域が汚染される」という原発事故の一要因となったことは否めないであろう。筆者の「地域単位で成立していた戦前の電気事業は、現在の電事業のあり方を再考するには示唆的である」という指摘は、電気エネルギーに限ったことではなく、人口減少が確実に進む今後の日本において、地域資源の利用のあり方を考えていくうえで看過できないであろう。

第6章「上信鉾山鉄道とロウ石山」は、終戦とともない放棄された小規模鉾山・鉄道の歴史を、古老からの聞き取りにもとづいて再現・記録している。稼働時間も短くかつ規模も小さいことから、日本全国というマクロスケールでみれば、それほど特筆する事例とは言えないかもしれない。しかし、そこで働き、生活を営んだ人は確かにいたのである。こうした歴史の流れに埋もれつつある「地域産業」の記録を後世に伝えていくことは、地域のルーツをたどり、地域のアイデンティティを確認するためには軽視できないのではなかろうか。

第7章「群馬県沼田市（旧利根村）における森林鉄道の保存車両の修復と活用－3両の機関車に着目して」は、林野庁の施設に保存されていた3両の森林鉄道車両の保存・活用をめぐる地域における試行錯誤の記録と考察である。本章で注目したいのは、主体となった人々の動きを「内」と「外」という視点から分析している点と、こうした資源を活用する

際の「外」からの働きかけの役割およびそのアプローチの方法をとりあげている点である。当初は「保存」されていただけの車両を「活用」しようとした地元商工会のアプローチの有効性と問題点、そしてその後のボランティアという立場からの「保存」と「活用」に向けたプロセスが詳細に記録されている。地域に存在する産業遺産の活用方法について様々な取り組みがなされているが、費用や維持管理の問題が大きく、必ずしも有効に行われているとは言えない。そうしたなかで、本章の事例は、今後の産業遺産の利活用を考えていくうえで大いに参考になる。

第8章「群馬県における機械産業の系譜と将来像－自動車産業を中心に」は、主に自動車産業に焦点をあて、群馬県においてどのように機械産業が発達してきたかを統計資料や社史、政策記録などから分析したものである。奇しくも愛知県も群馬県と同様、自動車産業を中心とした機械産業、すなわち「ものづくり」に特色がある地域である。ではどのような違いがあるのか、共通項は何か、本章の分析方法に沿って比較することで、地域の特色を明らかにしてみたいと感じた。

第Ⅲ部「“思想”とともに生きた人々」には、群馬県を舞台として活躍した郷土の偉人の生き方とその思い・想いを綴った4つの章がおさめられている。第9章「中小坂鉄山の経営者園部寅五郎をめぐる人びと」は、園部寅五郎をはじめとする鉾山開発に携わった人々の様々な人間模様と鉾山とともに生きた人々の暮らしを紹介している。筆者が最後に指摘しているが、地方の一鉾山をめぐる経営者たちの動向をとらえていくに従い、「地方」というスケールにとどまらず、「日本」、そして「世界」というスケールへと登場人物の活動や視点が広がっていったことは、非常に興味深い。「ローカル」から「グローバル」への思考のヒントは、身近なところにもあることを再確認した。

第10章「後閑祐次の教育思想―“利根商”の創立」は、後閑祐次が利根商業高校設立にあたり、何を考え目指したかをそのライフヒストリーを交えつつ描いている。特に印象的だったのが、利根商が「地域に根差した学校」を目指したものであり、その教育

方針のひとつに「全地域教育」を掲げていたことである。地域の企業と連携しつつ、地域で学校を育てていく、という精神は、「地域を見つめ、地域を活かす」を銘打った愛知大学地域政策学部の理念にも通ずるところが大いにある。さらにこの背景ある後閑祐次の「現今社会の中で一番大切なことは教育である」という思想は、人口構造が大きく変わる今後、留意していきたいと感じた。

第11章「たった一つの詩「帽子」の再発見と「霧積」－森村誠一『人間の証明』の舞台」は、西條八十による詩「帽子」をとりあげ、地元温泉経営者により発見された過程と、小説家により推理小説において人間模様を描く根底を形づくる要素として描かれた過程とをそれぞれ解説している。詩の舞台は碓氷から霧積へ向かう道であるが、作者の八十は実際に歩いたわけではない、という解釈は興味深い。詩は母からの愛情を振り返る子の心情をつづったものと評者はとらえたが、そうした舞台の適地として、「碓氷から霧積への道」を八十は選んだのかもしれない。そして、実際に霧積温泉から浅間高原への道を一人で歩いた森村は、母から子への愛情を示す風景として霧積への道を共有できたが故に、小説内において「帽子」をとりあげたのではないかと。昨今、フィルムコミッションやいわゆる「聖地巡礼」など、小説や映画、アニメなどの舞台となった地域において地域活性化や観光振興などをはかる取り組みが数多くみられる。しかしメディアとしての話題性だけでなく、その舞台となった地域がもつ「意味」を共有できるようにしていかなければ、持続的な取り組みにはならないのではないかと強く感じた。

第12章「近代温泉医療の夢と挫折－ベルツ・花袋の伊香保体験をめぐる」は、明治期のドイツ医学者であるベルツが、観光地・保養地としての意味が強い日本の湯治場を西洋式の療養地として改良しようとした過程が示されている。国際市場の開拓という視座から「医療観光」が近年注目を集めているが、100年以上前に、外国人医師によって温泉を利用した医療が提言されていたことは興味深い。国際市場という視点に立った場合、日本の温泉・湯治は看過できない資源であることに異論はないである

う。しかし、その際に「観光地」としての側面に傾倒しがちになる可能性があるため、「療養地」として温泉地に対する医学的な裏付けを示す必要がある。そうした時に、湯治という伝統を生かしながら科学的な提案を行ったベルツの功績から学ぶことは多いのではないだろうか。ただその際には、筆者が指摘している温泉への「本能」や「なつかしさ」のなかにある日本人の民族的アイデンティティを地域の人々とともに再度検証していくことは必要不可欠であろう。

以上、3部全12章についてそれぞれ簡単な紹介を交えつつ私見を述べた。本書の書評を執筆しながら強く感じたのは、「地域文化」の理解なくしては「地域政策」に対する哲学的意味の加味は難しいのではないかと、ということである。たとえば評者は愛知大学地域政策学部においてまちづくりコースに所属しており、いくつかのまちづくり活動に参加している。そうした際に再確認するのは、まちづくりにおいては経済的原理だけでなく、その土地が持つ記憶、文化も考えなければ、「ボトムアップ型のまちづくり」とはならないということである。すなわち、まちをいわゆる「コモンズ」としてとらえるならば、まちの記憶、文化を共有しながら、まちに関わる人々が個々のレベルで解釈していく必要があるであろう。そうした時に、地域文化、すなわち地域の記憶を丹念に掘り起こしてきたプロジェクト（本書）は、今後のまちづくりを考えていくだけでなく、愛知大学地域政策学部が「地域政策」に取り組んでいくうえで、そのプロジェクトの先達として学ぶものが多いと考えている。

そうした意味でも、全12章にわたって描いてきた「群馬の地域文化」が、全体として「群馬の地域政策（文化政策）」にどのようにつながってくるか、その提案や可能性についてまとめた章が最終章としてあっても良かったように思う。そうすれば、地域文化という視点からの地域政策という取り組みをより明確に説明できたのではないだろうか。もっとも、まず「現状」を確認することは必須であるし、個々の章でも、文化政策に対する提言なども行われている。さらにこの命題は「地域政策学部」、「地域政策学科」を有する全国の大学がそれぞれ取り組ん

でいくべきことでもあるだろう。その嚆矢としての本書の意義は大きい。

現在、評者は学生とともに豊橋市中心市街地の南に位置する「水上ビル」を対象として、まちづくりに参加している。その際に、「水上ビルがいかにして作られてきたか」、「水上ビルを作ってきた人々(商店主)はどのような信念を持っていたか」を示した資料に触れたり、話を聞いたりする機会を得ている。そうした過程で、新たな事実の発見や資料の確認などに触れる機会も多い。こうした水上ビルにまつわる“文化”を現地の人々とともにまとめていくことが、少しでも今後の水上ビルのまちづくりに役立てればと感じていたが、本書を読んで改めてそのことに対する意義を確認できた。

そうした意味でも、これから地域政策を学び、取り組もうとしている学生や研究者だけでなく、地域文化の担い手である地域の人々にもぜひとも一読を勧めたい。

受稿：2013年6月9日

受理：2013年6月13日